

**経団連 低炭素社会実行計画 2020 年度フォローアップ調査**

**回答票Ⅱ（『個別業種編』原稿）**

**石灰製造工業会の低炭素社会実行計画フェーズⅠ**

		計画の内容
1. 国内の事業活動における 2020 年の削減目標	目標水準	2020 年時点における活動量に対して、BAU CO <sub>2</sub> 排出量から 15 万 t-CO <sub>2</sub> 削減を目指す。
	目標設定の根拠	<p><u>対象とする事業領域：</u> 生石灰、消石灰、軽焼ドロマイト、及び水酸化ドロマイトの製造工程。</p> <p><u>将来見通し：</u> 2020 年度の石灰生産活動量は 1,080 万 t と試算した。これは最大ユーザーである鉄鋼業の使用実績と生産見通しから求めた。</p> <p><u>BAT：</u> 限られたリサイクル燃料の使用拡大及び熱効率の改善などを図るとともに最新の省エネ技術を積極的に導入していく。</p> <p><u>電力排出係数：</u> 2007 年度基礎排出係数－受電端</p> <p><u>その他：</u></p>
2. 主体間連携の強化 (低炭素製品・サービスの普及を通じた 2020 年時点の削減)		<p>①一般ゴミ焼却時に使用される酸性ガス除去用消石灰に代わり、高反応性消石灰の開発により従来の消石灰と比べて重量比で約 40%の減量が図れるので運搬効率の向上に寄与。</p> <p>②モーダルシフト（トラック輸送から海上輸送）による CO<sub>2</sub> 排出量の抑制。</p> <p>③生石灰を低温で熱効率の良い石灰専用炉で製造することで、鉄鋼業の省エネに寄与。</p>
3. 国際貢献の推進 (省エネ技術の普及などによる 2020 年時点の海外での削減)		特になし。
4. 革新的技術の開発 (中長期の取組み)		特になし。
5. その他の取組・特記事項		特になし。

## 石灰製造工業会の低炭素社会実行計画フェーズⅡ

		計画の内容
1. 国内の事業活動における 2030 年の目標等	目標・行動計画	2020 年度 BAU 排出量から 15 万 t-CO <sub>2</sub> 削減に加え、追加で 12 万 t-CO <sub>2</sub> (合計 27 万 t-CO <sub>2</sub> ) 削減を目指す。ただし、前提条件(生産量及び燃料事情等)が変化した場合は目標値の見直しを行う。
	設定の根拠	<p><u>対象とする事業領域：</u> 生石灰、消石灰、軽焼ドロマイト、及び水酸化ドロマイトの製造工程。</p> <p><u>将来見通し：</u> 低炭素社会実行計画では 2020 年度の生産活動量を 1,080 万 t と見込んでいる。2030 年度の生産活動量、電力係数及び燃料価格等のエネルギー事情が精度良く想定出来ないことから、2020 年度を基準年とし、投資活動等自助努力による CO<sub>2</sub> 削減量を目標値とした。従って、2030 年度の生産活動量は 2020 年度見通しと同じく 1,080 万 t とし、BAT (Best Available Technologies) の推進で、2020 年度目標に加えて 12 万 t-CO<sub>2</sub> の削減を目指す。</p> <p><u>BAT：</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 運転改善、設備・機械効率の改善で 5 万 t-CO<sub>2</sub> 削減</li> <li>・ リサイクル燃料の使用拡大で 5 万 t-CO<sub>2</sub> 削減</li> <li>・ 排出エネルギー回収で 2 万 t-CO<sub>2</sub> 削減</li> </ul> <p><u>電力排出係数：</u> 2007 年度基礎排出係数－受電端</p> <p><u>その他：</u></p>
2. 主体間連携の強化  (低炭素製品・サービスの普及や従業員に対する啓発等を通じた取組みの内容、2030 年時点の削減ポテンシャル)		<p>高性能性材料の開発、モーダルシフト、鉄鋼用石灰による削減。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 具体的な削減量の推定については今後調査予定。</li> </ul>
3. 国際貢献の推進  (省エネ技術の海外普及等を通じた 2030 年時点の取組み内容、海外での削減ポテンシャル)		<p>発展途上国に対して、技術支援することでエネルギー原単位を削減する。</p>
4. 革新的技術の開発  (中長期の取組み)		<p>特になし。</p>
5. その他の取組・特記事項		<p>省エネ・CO<sub>2</sub> 排出削減のための取組・PR 活動を進める。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 消費者への啓発活動としてホームページで取組の紹介を行う。また環境パンフレット等の提供を行う。</li> <li>・ 業界内で年 1 回行っている石灰工業技術大会で毎年、フォローアップ報告と今後の取り組み等について説明を行い、更なる協力・理解を求めている。</li> <li>・ 業界誌などで実行計画非参加会員会社に対しても CO<sub>2</sub> 排出削減 行動を呼びかける。</li> </ul>

# 石灰製造工業会における地球温暖化対策の取組み

2020年11月13日

石灰製造工業会

## I. 石灰製造工業会の概要

### (1) 主な事業

生石灰、消石灰、軽焼ドロマイト及び水酸化ドロマイトの製造及び販売業。

標準産業分類コード：2193 石灰製造業

### (2) 業界全体に占めるカバー率

業界全体の規模		業界団体の規模		低炭素社会実行計画 参加規模	
企業数		団体加盟 企業数	91社	計画参加 企業数	86社 (95%)
市場規模		団体企業 売上規模		参加企業 売上規模	
エネルギー 消費量		団体加盟 企業エネ ルギー消 費量		計画参加 企業エネ ルギー消 費量	

### (3) データについて

【データの算出方法（積み上げまたは推計など）】

会員企業に対して生産活動量やエネルギー消費量等のアンケート調査を行い、積み上げで算出を行っている。

【生産活動量を表す指標の名称、それを採用する理由】

生産量(万 t)、石灰製造工業会の生産活動を示す上で最も一般的な指標。

【業界間バウンダリーの調整状況】

バウンダリーの調整は行っていない

(理由)

バウンダリーの調整を実施している

<バウンダリーの調整の実施状況>

製鉄所内で石灰製品を構内生産している事業所については、日本鉄鋼連盟との協議により、日本石灰協会加盟企業の事業所分は、2005年度から石灰製造工業会分に含むこととした。なお、バウンダリー調整は1990年度から行っている。

【その他特記事項】

## II. 国内の事業活動における排出削減

### (1) 実績の総括表

【総括表】(詳細は回答票 I 【実績】参照。)

	基準年度 (2020年度 BAU)	2018年度 実績	2019年度 見通し	2019年度 実績	2020年度 見通し	2020年度 目標	2030年度 目標
生産活動量 (単位: 万 t)	1080.0	906.0		853.6		1080.0	1080.0
エネルギー 消費量 (単位: 万kl)	111.5	79.9		75.3		108.2	106.1
電力消費量 (億kWh)	6.35	5.23		5.03		6.12	5.88
CO <sub>2</sub> 排出量 (万t-CO <sub>2</sub> )	325.7 ※1	223.0 ※2	※3	209.9 ※4	※5	310.7 ※6	298.7 ※7
エネルギー 原単位 (単位: kl/t)	0.103	0.088		0.088		0.100	0.098
CO <sub>2</sub> 原単位 (単位: t-CO <sub>2</sub> /t)	0.302	0.246		0.246		0.288	0.277

### 【電力排出係数】

	※1	※2	※3	※4	※5	※6	※7
排出係数[kg-CO <sub>2</sub> /kWh]	0.454	0.463		0.444		0.454	0.454
基礎排出/調整後/その他	基礎排出	調整後		調整後		基礎排出	基礎排出
年度	2007	2018		2019		2007	2007
発電端/受電端	受電端	受電端		受電端		受電端	受電端

(2) 2019年度における実績概要

【目標に対する実績】

<フェーズⅠ (2020年) 目標>

目標指標	基準年度/BAU	目標水準	2020年度目標値
CO <sub>2</sub> 排出量	325.7万 t -CO <sub>2</sub>	▲15万 t -CO <sub>2</sub>	310.7万 t -CO <sub>2</sub>

実績値			進捗状況		
基準年度実績 (BAU目標水準)	2018年度 実績	2019年度 実績	基準年度比 /BAU目標比	2018年度比	進捗率*
▲15万 t -CO <sub>2</sub>	▲32.6万 t -CO <sub>2</sub>	▲22.1万 t -CO <sub>2</sub>	147%	68%	147%

\* 進捗率の計算式は以下のとおり。

進捗率【BAU 目標】 = (当年度の BAU - 当年度の実績水準) / (2020 年度の目標水準) × 100 (%)

<フェーズⅡ (2030年) 目標>

目標指標	基準年度/BAU	目標水準	2030年度目標値
CO <sub>2</sub> 排出量	325.7万 t -CO <sub>2</sub>	▲27万 t -CO <sub>2</sub>	298.7万 t -CO <sub>2</sub>

実績値			進捗状況		
基準年度実績 (BAU目標水準)	2018年度 実績	2019年度 実績	基準年度比 /BAU目標比	2018年度比	進捗率*
▲27万 t -CO <sub>2</sub>	▲32.6万 t -CO <sub>2</sub>	▲22.1万 t -CO <sub>2</sub>	82%	68%	82%

\* 進捗率の計算式は以下のとおり。

進捗率【BAU 目標】 = (当年度の BAU - 当年度の実績水準) / (2030 年度の目標水準) × 100 (%)

【調整後排出係数を用いた CO<sub>2</sub> 排出量実績】

	2019年度実績	基準年度比	2018年度比
CO <sub>2</sub> 排出量	209.9万t-CO <sub>2</sub>	-	94.1%

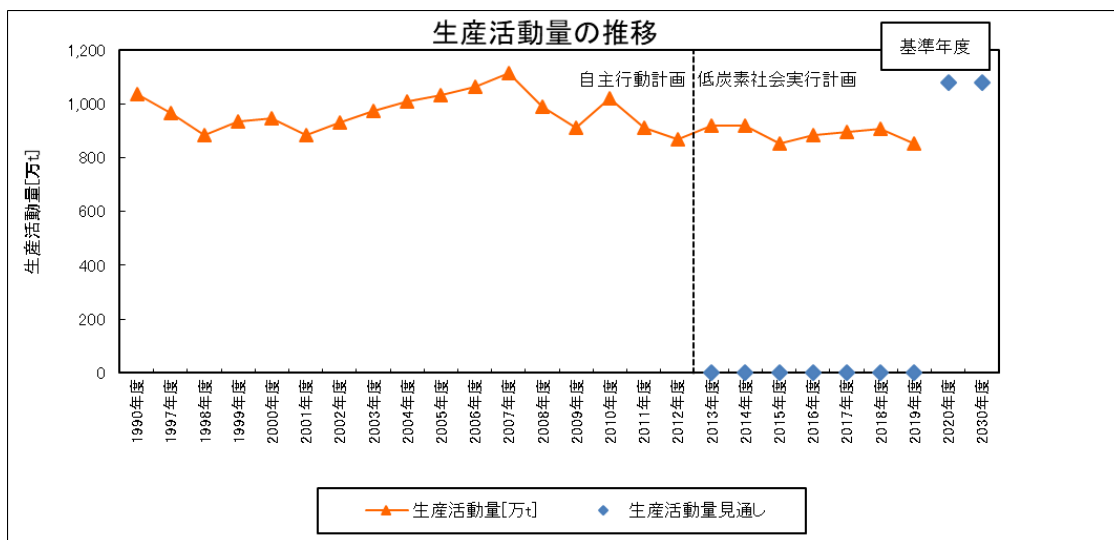
(3) 生産活動量、エネルギー消費量・原単位、CO<sub>2</sub> 排出量・原単位の実績

【生産活動量】

<2019 年度実績値>

生産活動量 (単位 : 万 t) : 853.6 (基準年度比 79.0%、2018 年度比 94.2%)

<実績のトレンド>



生産活動量の実績は、1990 年度 1,034.9 万 t であり、近年の生産動向を見ると、2002 年度から 2007 年度まで 6 年連続で生産量が増加し (この間に 25.7% の生産量増)、2007 年度には調査開始以降最高の生産量 1,114.1 万 t となった。その後リーマンショックを発端とした世界不況や、東日本大震災等の諸影響により生産量は 1,000 万 t 未満の低調で推移し、2016 年度は 882.3 万 t、2017 年度 896.0 万 t、2018 年度 906.0 万 t となった。2019 年度は前年度比 5.8% 減の 853.6 万 t となっている。2012 年度以降の増減は主要ユーザーである鉄鋼メーカーの粗鋼生産量等の変動に左右されたためと思われる。

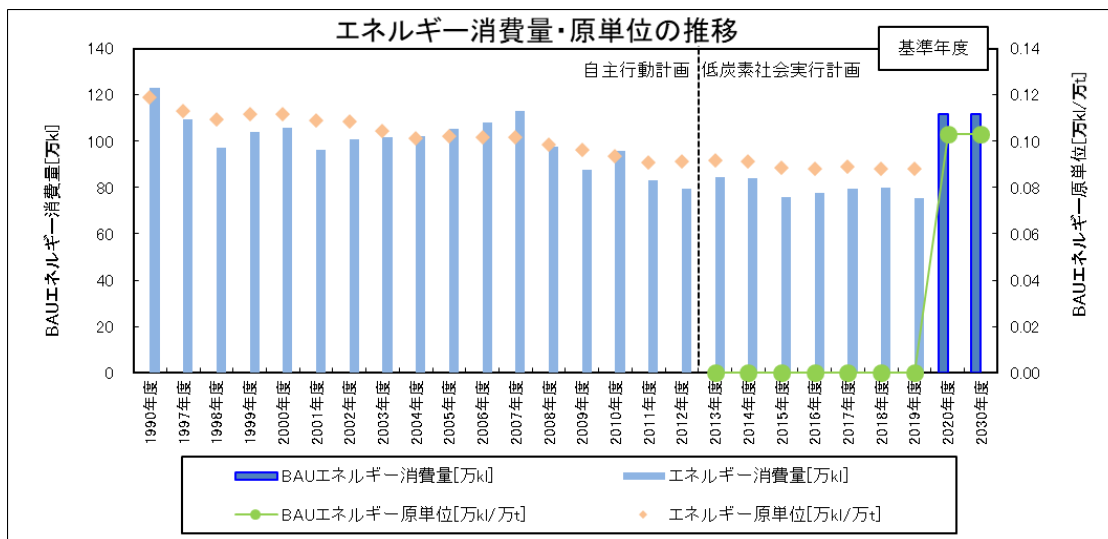
## 【エネルギー消費量、エネルギー原単位】

＜2019年度の実績値＞

エネルギー消費量(単位：原油換算万kl)：75.3 (基準年度比 67.5%、2018年度比 94.2%)

エネルギー原単位(単位：原油換算kl/生産t)：0.088 (基準年度比 85.4%、2018年度比 100.0%)

## ＜実績のトレンド＞



(過去のトレンドを踏まえた当該年度の実績値についての考察)

(エネルギー消費量)

原油換算でのエネルギー消費量の実績は、1990年度123.1万klであり、近年の動向を見ると、前述の生産活動量の変化によるところが大きい。2012年度以降は生産量の停滞に伴いエネルギー消費量も減少し、2016年度は77.9万kl、2017年度は79.7万kl、2018年度は79.9万klとなった。2019年度は生産量の減少（前年度比5.8%減）により75.3万kl（前年度比5.8%減）となった。

(エネルギー消費原単位)

エネルギー消費原単位の実績は、1990年度0.119kl/t、2000年度0.112kl/t、2010年度0.094kl/t、2016年度0.088kl/t、2017年度0.089kl/t、2018年度0.088kl/t、2019年度0.088kl/tとなり、1990年度よりリサイクル燃料の使用拡大、熱効率の改善等継続的な対策によって中長期的にはエネルギー消費原単位が低減している。

## ＜他制度との比較＞

(省エネ法に基づくエネルギー原単位年平均▲1%以上の改善との比較)

2019年度のエネルギー消費原単位は1990年度比▲26.1%であり、省エネ法の改善目標である年平均▲1.0%の改善とならなかった。直近10年間では▲6.4%、直近5年間では▲1.1%となり改善効果が現れづらくなっている。

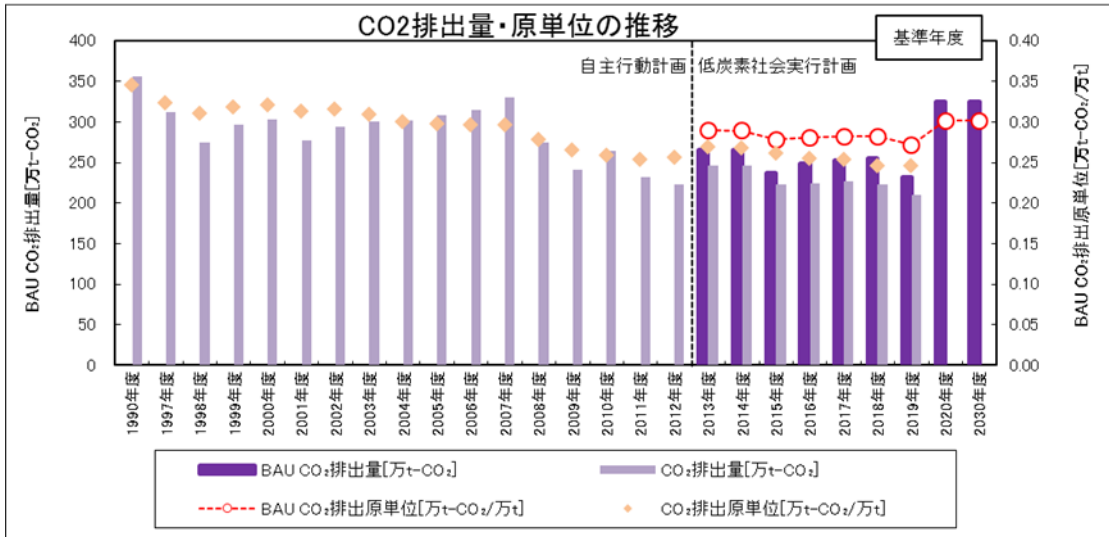
【CO<sub>2</sub>排出量、CO<sub>2</sub>原単位】

＜2019年度の実績値＞

CO<sub>2</sub>排出量（単位：万 t-CO<sub>2</sub>、電力排出係数：0.444 kg-CO<sub>2</sub>/kWh）：209.9（基準年度比 64.4%、2018年度比 94.1%）

CO<sub>2</sub>原単位（単位：t-CO<sub>2</sub>/生産 t、電力排出係数：0.444kg-CO<sub>2</sub>/kWh）：0.246（基準年度比 81.5%、2018年度比 100.0%）

＜実績のトレンド＞



電力排出係数：0.444kg-CO<sub>2</sub>/kWh

（過去のトレンドを踏まえた当該年度の実績についての考察）

（CO<sub>2</sub>排出量）

CO<sub>2</sub>排出量の実績は1990年度356.6万 tであり、2008年度以降はエネルギー消費量の増減に伴いCO<sub>2</sub>排出量も変動した。2016年度は224.6万 t、2017年度は226.7万 t、2018年度は223.0万 tとなっている。2019年度は前年度比5.9%減の209.9万 tとなっている。

（CO<sub>2</sub>原単位）

CO<sub>2</sub>原単位の実績は、1990年度0.345t-CO<sub>2</sub>/t-生産量、2000年度0.321 t-CO<sub>2</sub>/t-生産量、2010年度0.259 t-CO<sub>2</sub>/t-生産量、2016年度0.255t-CO<sub>2</sub>/t-生産量、2017年度0.253t-CO<sub>2</sub>/t-生産量、2018年度0.246t-CO<sub>2</sub>/t-生産量、2019年度0.246t-CO<sub>2</sub>/t-生産量であり、中長期的にはCO<sub>2</sub>原単位が低減しており、これは省エネ対策効果が現れたものと考えられる。近年は、生産活動の変化が主なCO<sub>2</sub>原単位の増減要因となっている。



【要因分析】（詳細は回答票 I 【要因分析】参照）

（CO<sub>2</sub>排出量）

要因	1990 年度 ➤ 2019 年度	2005 年度 ➤ 2019 年度	2013 年度 ➤ 2019 年度	前年度 ➤ 2019 年度
経済活動量の変化	▲19.3	▲19.2	▲7.3	▲6.0
CO <sub>2</sub> 排出係数の変化	▲3.8	▲4.5	▲4.7	▲0.1
経済活動量あたりのエネルギー使用量 の変化	▲29.9	▲14.6	▲4.0	0.1
CO <sub>2</sub> 排出量の変化	▲53.0	▲38.3	▲16.0	▲6.0

(%)

（要因分析の説明）

（CO<sub>2</sub> 排出量）

1990 年度との比較では 2019 年度の CO<sub>2</sub> 排出量は 53.0% 減少した。生産量の減少の影響が ▲19.3%、排出係数の変化の影響が ▲3.8%、経済活動量あたりのエネルギー使用量の変化は ▲29.9% となった。

2005 年度との比較では 2019 年度の CO<sub>2</sub> 排出量は 38.3% 減少した。生産量の減少の影響が ▲19.2%、排出係数の変化の影響が ▲4.5%、経済活動量あたりのエネルギー使用量の変化は ▲14.6% となった。

2013 年度との比較では 2019 年度の CO<sub>2</sub> 排出量は 16.0% 減少した。生産量の減少の影響が ▲7.3%、排出係数の変化の影響が ▲4.7%、経済活動量あたりのエネルギー使用量の変化は ▲4.0% となった。前年度との比較では 2019 年度の CO<sub>2</sub> 排出量は 6.0% 減少した。生産量の増加の影響が ▲6.0%、排出係数の変化の影響が ▲0.1%、経済活動量あたりのエネルギー使用量の変化は +0.1% となった。

(4) 実施した対策、投資額と削減効果の考察

【総括表】

年度	対策	投資額	年度当たりの エネルギー削減量 CO <sub>2</sub> 削減量	設備等の使用期間 (見込み)
2019 年度	省エネ・高効率 設備の導入	439,000 千円	2,737 t-CO <sub>2</sub>	
	廃熱の回収	75,000 千円	2,735 t-CO <sub>2</sub>	
	燃料転換	23,000 千円	9,469 t-CO <sub>2</sub>	
	運用の改善	69,000 千円	1,192 t-CO <sub>2</sub>	
	その他	0 千円	0 t-CO <sub>2</sub>	
2020 年度	省エネ・高効率 設備の導入	240,900 千円	2,743 t-CO <sub>2</sub>	
	廃熱の回収	0 千円	0 t-CO <sub>2</sub>	
	燃料転換	2,800 千円	4,341 t-CO <sub>2</sub>	
	運用の改善	48,400 千円	285 t-CO <sub>2</sub>	
	その他	0 千円	0 t-CO <sub>2</sub>	
2021 年度 以降	省エネ・高効率 設備の導入	1,369,400 千円	3,581 t-CO <sub>2</sub>	
	廃熱の回収	50,000 千円	320 t-CO <sub>2</sub>	
	燃料転換	6,000 千円	582 t-CO <sub>2</sub>	
	運用の改善	56,000 千円	1,740 t-CO <sub>2</sub>	
	その他	30,000 千円	71 t-CO <sub>2</sub>	

【2019 年度の実績】

(取組の具体的事例)

- ・ 省エネ・高効率設備の導入 (高効率モーターへの更新、ファンのインバータ制御等)
- ・ 廃熱の回収 (製品持ち去り熱の低減等)
- ・ 燃料転換 (リサイクル燃料の使用拡大等)
- ・ 運用の改善 (プロセスの合理化等)

(取組実績の考察)

2019 年度に実施した対策事例として 49 件の報告があった。その投資額は約 6.1 億円で、推計できる範囲でのエネルギー使用量削減効果は原油換算で約 5,400kl (2019 年度エネルギー使用量の約 0.7%相当)、CO<sub>2</sub> 排出量削減効果は約 1.6 万 t (2019 年度 CO<sub>2</sub> 排出量の約 0.8%相当) である。

【2020 年度以降の取組予定】

（今後の対策の実施見通しと想定される不確定要素）

2020 年度以降に取組予定の対策事例として 75 件の報告があった。その投資額は約 18.0 億円で、推計できる範囲でのエネルギー使用量削減効果は原油換算で約 6,000kl、CO<sub>2</sub> 排出量削減効果は約 1.4 万 t と想定される。

不確定要素として、生産量の増減により投資計画の変更が考えられ、投資額が増額されれば、その分、効果も増加することが想定される。

(5) 2020年度の目標達成の蓋然性

【目標指標に関する進捗率の算出】

\* 進捗率の計算式は以下のとおり。

進捗率【BAU目標】 = (当年度のBAU－当年度の実績水準) / (2020年度の目標水準) × 100 (%)

進捗率 = (232.0万t-CO<sub>2</sub> - 209.9万t-CO<sub>2</sub>) / 15万t-CO<sub>2</sub>

= 147.3%

【自己評価・分析】 (3段階で選択)

<自己評価とその説明>

目標達成が可能と判断している

(現在の進捗率と目標到達に向けた今後の進捗率の見通し)

前述のとおり当業種では、継続的に省エネルギー・CO<sub>2</sub>排出量削減を狙った投資を行い、成果を得てきた。調査を開始した2002年度以降、総額158億円程度の投資を行い、推計されるCO<sub>2</sub>削減量は累計55万tである。

今後も中長期的な投資が計画されている。これまでの実績からCO<sub>2</sub>削減量は年3万t程度と見込まれている。

(目標到達に向けた具体的な取組の想定・予定)

前述のように、今後の中長期的な投資の計画により目標を達成できると確信している。

(既に進捗率が2020年度目標を上回っている場合、目標見直しの検討状況)

各年度により進捗率が変動しており、今後も生産量動向による影響が考えられるため、見直しを行わない。今後も削減努力を継続する。

目標達成に向けて最大限努力している

(目標達成に向けた不確定要素)

(今後予定している追加的取組の内容・時期)

目標達成が困難

(当初想定と異なる要因とその影響)

(追加的取組の概要と実施予定)

(目標見直しの予定)

(6) 2030年度の目標達成の蓋然性

【目標指標に関する進捗率の算出】

\* 進捗率の計算式は以下のとおり。

進捗率【BAU目標】 = (当年度のBAU－当年度の実績水準) / (2030年度の目標水準) × 100 (%)

進捗率 = (232.0万 t-CO<sub>2</sub> - 209.9万 t-CO<sub>2</sub>) / 27万 t-CO<sub>2</sub>

= 81.9%

【自己評価・分析】

(目標達成に向けた不確定要素)

各年度により進捗率が変動しており、今後も生産量動向による影響が考えられる。

(既に進捗率が2030年度目標を上回っている場合、目標見直しの検討状況)

(7) クレジット等の活用実績・予定と具体的事例

【業界としての取組】

- クレジット等の活用・取組をおこなっている
- 今後、様々なメリットを勘案してクレジット等の活用を検討する
- 目標達成が困難な状況となった場合は、クレジット等の活用を検討する
- クレジット等の活用は考えていない

【活用実績】

【個社の取組】

- 各社でクレジット等の活用・取組をおこなっている
- 各社ともクレジット等の活用・取組をしていない

【具体的な取組事例】

取得クレジットの種別	(国内クレジット) 目標設定型排出量取引制度
プロジェクトの概要	地球温暖化対策計画
クレジットの活用実績	CO <sub>2</sub> 排出量の超過削減量取引

取得クレジットの種別	
プロジェクトの概要	
クレジットの活用実績	

取得クレジットの種別	
プロジェクトの概要	
クレジットの活用実績	

(8) 本社等オフィスにおける取組  
【本社等オフィスにおける排出削減目標】

業界として目標を策定している

削減目標：〇〇年〇月策定  
【目標】  
  
【対象としている事業領域】

業界としての目標策定には至っていない

(理由)

自社ビルやテナント等の形態に関わらず、本社オフィスとしてエネルギー使用量が把握できる企業を対象としている。本社オフィス等からの排出量は石灰製造に関わる排出量と比較して遥かに少量であるため、当業種において目標設定を行っていない。

【エネルギー消費量、CO<sub>2</sub>排出量等の実績】

本社オフィス等のCO<sub>2</sub>排出実績 (57社計)

	2009 年度	2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度	2016 年度	2017 年度	2018 年度	2019 年度
延べ床面積 (万㎡) :	2.7	2.8	2.0	2.1	1.9	2.0	2.2	2.0	1.9	2.0	2.0
CO <sub>2</sub> 排出量 (万 t-CO <sub>2</sub> )	0.14	0.15	0.11	0.13	0.11	0.11	0.11	0.10	0.09	0.08	0.08
床面積あたりの CO <sub>2</sub> 排出量 (kg-CO <sub>2</sub> /m <sup>2</sup> )	50.6	54.9	54.6	60.9	58.6	53.4	47.8	49.1	48.4	42.3	39.7
エネルギー消費 量 (原油換算) (万 kl)	0.08	0.09	0.05	0.06	0.05	0.05	0.05	0.05	0.04	0.04	0.04
床面積あたりエ ネルギー消費量 (l/m <sup>2</sup> )	29.3	31.2	26.1	26.4	25.2	23.5	21.8	23.0	23.5	21.8	21.3

※調査年度によって回答社数が異なる (56~63社)。19年度は57社が回答

II. (2) に記載のCO<sub>2</sub>排出量等の実績と重複

データ収集が困難

(課題及び今後の取組方針)

## 【2019 年度の取組実績】

### （取組の具体的事例）

- ・ 事務所内温度管理の徹底、不要電灯の消灯。
- ・ 室内照明の間引きを行っている。
- ・ 冷房時の室温 28℃、暖房時の室温 23℃を目途に調整している。
- ・ PC 省エネモード、照明の間引き、昼休みの消灯を行っている。
- ・ 充電器の取り外し、電源付タップ式コンセント使用で、待機電力の削減をしている。
- ・ 省エネ法のエネルギー原単位 1%改善をベースに、対前年度比 1%減を目標としている。
- ・ 対前年度比 3%削減を目標としている。
- ・ 省エネ法削減目標に各部門同調し、前年度比 1%削減を目標としている。
- ・ 事務所棟電力使用量の目標を 2014・2015 年度の実績平均値 45,000kWh より 14%低減の 38,850kWh に設定し、達成を続けている。
- ・ 前年度の年間電力使用量を下回ることを目標としており、2019 年度は▲6,956kWh だった。
- ・ 2019 年度実績は、目標に比べて+6,000kWh と冬場の暖冬にも関わらず、夏場の空調電力が増加したため悪化した。

### （取組実績の考察）

本社オフィス等からの排出量は、石灰製造に関わる排出量と比較して遥かに少量であるため、目標を定めている企業は少ない。しかしながら、省エネ法による報告義務等を踏まえ、工場のみでなく全体で取り組んでいる企業もあり、業種としての目標は設定していないが、最大限の省エネ努力を推進していく。不確定要素として、生産量の増減により投資計画の変更が考えられ、オフィス等に関わる投資額が増額されればその分の効果も増大することが予想される。



(9) 物流における取組

【物流における排出削減目標】

業界として目標を策定している

削減目標：〇〇年〇月策定

【目標】

【対象としている事業領域】

業界としての目標策定には至っていない

(理由)

輸送部門の調査については、工場内物流を調査範囲とした。工場内物流とは、工場敷地内の物資の輸送で客先への出荷前までを対象としている。運輸部門からの排出量は石灰製造に関わる排出量と比較して遥かに少量であるため、当業種において目標設定を行っていない。

【エネルギー消費量、CO<sub>2</sub>排出量等の実績】

	2009 年度	2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度	2016 年度	2017 年度	2018 年度	2019 年度
輸送量 (万トン)											
CO <sub>2</sub> 排出量 (万t-CO <sub>2</sub> )	0.41	0.53	0.55	0.49	0.64	0.61	0.44	0.48	0.50	0.54	0.47
輸送量あたりCO <sub>2</sub> 排出量 (kg-CO <sub>2</sub> /トン)											
エネルギー消費 量(原油換算) (万kl)	0.16	0.20	0.21	0.18	0.24	0.23	0.16	0.18	0.19	0.20	0.18
輸送量あたりエ ネルギー消費量 (l/トン)											

※調査年度によって回答社数が異なる(56~63社)。19年度は59社が回答

II.(1)に記載のCO<sub>2</sub>排出量等の実績と重複

データ収集が困難

(課題及び今後の取組方針)

## 【2019 年度の取組実績】

### （取組の具体的事例）

- ・ アイドリングストップの徹底、急発進、急停車しない。
- ・ 重機・フォークリフト等の燃料に「植物由来の添加剤」を加え、エネルギー節減と排ガスのクリーン化を推進している。
- ・ 電気式フォークリフトの採用により、軽油 1300L/年相当が削減できた。
- ・ 工場内の横持ちを減らしたことにより、軽油 1800L/年が削減できた。
- ・ 大型作業車の廃止により、軽油 3000L/年が削減できた。
- ・ 専門スタッフによるフォークリフトやダンプの定期点検・整備の実施。
- ・ 特定特殊自動車排出ガス規制基準適合車を導入。

### （取組実績の考察）

工場内物流からの排出量は、石灰製造に関わる排出量と比較して遥かに少量であるため、目標を定めている企業はほとんどない。しかしながら、業種としての目標は設定していないが、最大限の省エネ努力を推進していく。

不確定要素として、生産量の増減により投資計画の変更が考えられ、輸送部門に関わる投資額が増額されればその分の効果も増大することが予想される。

### III. 主体間連携の強化

#### (1) 低炭素製品・サービス等の概要、削減見込量及び算定根拠

	低炭素製品・サービス等	削減実績 (推計) (2019年度)	削減見込量 (ポテンシャル) (2020年度)	削減見込量 (ポテンシャル) (2030年度)
1	高反応性消石灰の製造出荷	2,395t-CO <sub>2</sub>		
2	運搬効率の改善	1,550t-CO <sub>2</sub>		
3	鉄鋼業で石灰石を生石灰に代替	-		

(当該製品等の特徴、従来品等との差異、及び削減見込み量の算定根拠や算定の対象としたバリューチェーン/サプライチェーンの領域)

#### 高反応消石灰の製造出荷

従来の消石灰と比べて反応効率が良く使用量約40%が削減できるため、製造及び運搬に要するエネルギーの削減

個別企業の実績に基づき算出

#### 運搬効率の改善

個別企業の実績に基づき算出 (1社より報告)

#### 鉄鋼業で石灰石を生石灰に代替

0.15 t-CO<sub>2</sub>/t-CaO

#### (2) 2019年度の実績

(取組の具体的事例)

#### 高反応消石灰の製造出荷

2019年度出荷実績138,420t(14社)より算定

#### 運搬効率の改善

約21百万トンキロを陸上輸送から船輸送に切り替え

#### 鉄鋼業で石灰石を生石灰に代替

- ① 石灰専用炉は予熱活用が可能であることから転炉と比較して熱効率が良好。
- ② 焼結工程で生石灰を使用することで通気性が改善され、コークス原単位が削減される。
- ③ 鉄鋼業ではコークス等カーボン系の燃料を使用することが多いが、石灰炉では廃プラスチック等リサイクル系燃料使用が可能であり、CO<sub>2</sub>原単位が低位。

石灰石から生石灰への反応を以下の2つプロセスを想定し、原単位差を算出した。

- 1) 製鉄所内でコークス燃焼によって生石灰を製造した場合のCO<sub>2</sub>原単位
- 2) 当業界の生石灰製造におけるCO<sub>2</sub>原単位

(取組実績の考察)

(3) 家庭部門、国民運動への取組み

【家庭部門での取組】

特になし。

【国民運動への取組】

特になし。

(4) 森林吸収源の育成・保全に関する取組み

特になし。

(5) 2020年度以降の取組予定

未定。

#### IV. 国際貢献の推進

##### (1) 海外での削減貢献の概要、削減見込量及び算定根拠

	海外での削減貢献	削減実績 (推計) (2019年度)	削減見込量 (ポテンシャル) (2020年度)	削減見込量 (ポテンシャル) (2030年度)
1	技術指導員の派遣	-	-	-
2				
3				

(削減貢献の概要、削減貢献量の算定根拠)

##### (2) 2019 年度の実績

(取組の具体的事例)

日本の石灰製造に係るエネルギー効率や CO<sub>2</sub>発生量を諸外国と比較する他、温暖化防止に関わる新技術を探るために、国際石灰協会に加盟し、情報交換を継続中である。

年一回開催されている国際石灰協会の総会と情報交換会は、2019 年はアルゼンチン共和国の首都であるブエノスアイレスで開催され、日本を含め世界 19 か国から 99 名の参加があった。

2018 年の世界の石灰生産量は 424 百万トであるが、このうち中国の生産量は 300 百万トある。

温暖化対策関連の発表では、EU は排出権取引の説明と 2050 年までにはゼロエミッションの目標とする動きの説明があった。カナダは炭素税の導入が州レベルで行われていて、その価格が州により異なるため問題が生じているとの説明があった。

(取組実績の考察)

##### (3) 2020 年度以降の取組予定

未定。

#### (4) エネルギー効率の国際比較

石灰焼成に関わるCO<sub>2</sub>排出原単位 (t-CO<sub>2</sub>/生産t)

(内容)

		日本	EU	米国	中国
石灰焼成に係る CO <sub>2</sub> 排出原単位 (t-CO <sub>2</sub> /生産 t)		0.30	0.32 <sup>*3</sup>	0.64 <sup>*1</sup>	不明
焼成炉形式 別保有率	シャフト (3.9~4.4GJ/t-CaO)	67%	85% <sup>*2</sup>	6% <sup>*2</sup>	22%
	ロータリー (5.6~7.5GJ/t-CaO)	25%	15% <sup>*2</sup>	94% <sup>*2</sup>	28%
	その他 (立炉, 旧式炉等)	8%	不明	不明	50%

\*1 : National Lime Association -2008 Status Report、\*2 : ZKG International No.11-2007

\*3 : \*1および\*2から算出

日本の石灰焼成に係るエネルギー起源CO<sub>2</sub>排出原単位を諸外国と比較すると、日本は直近0.30t-CO<sub>2</sub>/生産tに対し、一概に比較は出来ないが2008年度実績でEUは0.32t-CO<sub>2</sub>/生産t、米国では0.64t-CO<sub>2</sub>/生産tであり、日本の値は諸外国より良好なものである。

ただし、焼成炉の形式によるエネルギー効率・保有率の差や、使用燃料やカウント方法にも差があるため、CO<sub>2</sub>排出原単位にも差がある。

(比較に用いた実績データ) 2008年度

## V. 革新的技術の開発

(1) 革新的技術・サービスの概要、導入時期、削減見込量及び算定根拠

	革新的技術・サービス	導入時期	削減見込量
1	焼成炉排ガス中のCO <sub>2</sub> 回収技術	未定	
2			
3			

(技術・サービスの概要・算定根拠)

(2) 革新的技術・サービス開発・導入のロードマップ

	技術・サービス	2019	2020	2025	2030
1					
2					
3					

(3) 2019年度の実績

(取組の具体的事例)

(取組実績の考察)

(4) 2020年度以降の取組予定

未定。

## VI. その他

(1) CO<sub>2</sub>以外の温室効果ガス排出抑制への取組み  
フロンガスの石灰焼成炉での分解処理を実施している。

## VII. 国内の事業活動におけるフェーズⅠ、フェーズⅡの削減目標

### 【削減目標】

<フェーズⅠ（2020年）>（2012年2月策定）

2020年時点における活動量に対して、BAU CO<sub>2</sub>排出量から15万t-CO<sub>2</sub>削減を目指す。

<フェーズⅡ（2030年）>（2015年3月策定）

2020年度BAU排出量から15万t-CO<sub>2</sub>削減に加え、追加で12万t-CO<sub>2</sub>（合計27万t-CO<sub>2</sub>）削減を目指す。

### 【目標の変更履歴】

<フェーズⅠ（2020年）>

<フェーズⅡ（2030年）>

### 【その他】

#### （1）目標策定の背景

当業種製品最大の需要は鉄鋼用であり、過去の実績からも生産量は鉄鋼業界の生産活動量に大きく左右される。目標設定時の石灰生産量と粗鋼生産量の実績は下表のようになっている。

年	A：石灰生産量 (千 t)	B：粗鋼生産量 (千 t)	A÷B (石灰 kg/粗鋼 t)
2004	10,105	112,718	90
2005	10,339	112,471	92
2006	10,634	116,219	91
2007	11,141	120,203	93
2008	9,986	118,738	84
2009	9,096	93,720	97
2010	10,222	109,589	93
合計	71,523	783,658	91

他用途の影響により多少のばらつきはあるが、概ね粗鋼量あたりの石灰生産量は90kg/tで推移している。そこで、2020年度の石灰生産量は、日本鉄鋼連盟試算の粗鋼生産量12,000万tに90kgを乗じて1,080万tを見込んだ。

この数量をベースに、現在当業界を取り巻く燃料事情と生産量の近い2006～2007年度の実績を考慮し、算定した。2020年度のCO<sub>2</sub>排出量BAUは325.7万tと試算した。一方、今後検討されている対策の中で、技術的・経済的に2020年度までに実現可能と予想される最大限の排出CO<sub>2</sub>削減量は15万tとなった。

以上より、2020年度のCO<sub>2</sub>排出量目標を325.7万t-15万t=310.7万tに設定した。



## (2) 前提条件

### 【対象とする事業領域】

生石灰、消石灰、軽焼ドロマイト、及び水酸化ドロマイトの製造工程。

### 【2020年・2030年の生産活動量の見通し及び設定根拠】

#### <生産活動量の見通し>

2020年度、2030年度の石灰生産量は1,080万tと試算した。

#### <設定根拠、資料の出所等>

2020年度の石灰生産量は日本鉄鋼連盟の2018年度「低炭素社会実行計画」粗鋼生産見通しから求めた。2030年度の石灰生産量は、生産活動量、電力係数及び燃料価格等のエネルギー事情が精度良く想定出来ないことから、2020年度を基準年として、2030年度の実生産量は2020年度見通しと同じく1,080万tとした。

### 【その他特記事項】

## (3) 目標指標選択、目標水準設定の理由とその妥当性

### 【目標指標の選択理由】

製品毎に製造方法、製造能力、エネルギー使用原単位等が異なり、単純に原単位での比較は困難であるため、エネルギー起源のCO<sub>2</sub>排出量を指標としている。

### 【目標水準の設定の理由、自ら行いうる最大限の水準であることの説明】

#### <選択肢>

- 過去のトレンド等に関する定量評価（設備導入率の経年的推移等）
- 絶対量/原単位の推移等に関する見通しの説明
- 政策目標への準拠（例：省エネ法1%の水準、省エネベンチマークの水準）
- 国際的に最高水準であること
- BAUの設定方法の詳細説明
- その他

#### <最大限の水準であることの説明>

これまでの取り組みである省エネ・高効率設備の導入、廃熱の回収、燃料転換、及び運用の改善を推進する。また、BATを最大限導入する。

【BAU の定義】 ※BAU 目標の場合

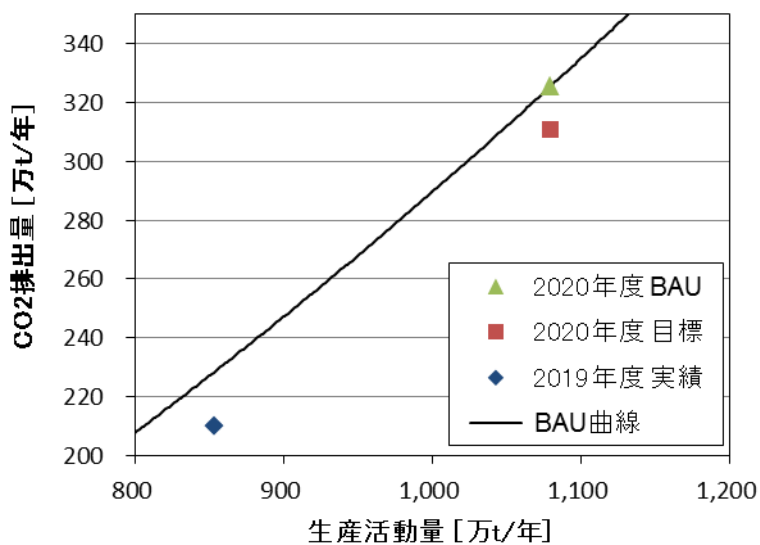
<BAU の算定方法>

生産活動量と CO<sub>2</sub> 排出原単位の実績をもとに次のように CO<sub>2</sub> 排出量 (BAU) の式を算出した。

$$\begin{aligned} \text{CO}_2 \text{ 排出量 (BAU)} &= \text{CO}_2 \text{ 排出原単位} \times \text{生産活動量} \times \text{CO}_2 \text{ 排出係数変化分} \\ &= (0.15 \times \text{生産活動量} + 139.57) \times \text{生産活動量} \div 1000 \times \text{CO}_2 \text{ 排出係数変化分} \end{aligned}$$

(2019 年度 CO<sub>2</sub> 排出係数変化分は 1.016)

<BAU 水準の妥当性>



<BAU の算定に用いた資料等の出所>